打つべきか打たざるべきか

早稲田大学教授 森山卓郎（もりやまたくろう）

平成23年度「国語に関する世論調査」では、「文章や手紙、メールなどを書くときの句読点等の使い方に関して、何か困っていることがあるか」という質問に対して、「困っていることがある」という回答が24.1％であったという（2069人への調査）。

句読点は重要だ。次の文（？）は句読点を打つと劇的にわかりやすくなる。

ももももすももももももももも
ももももものうち

次のようになる。

ももも、もも。すももも、もも。
ももも、すももも、もののうち。

まあ、句読点がなくても漢字で書くと十分わかるという話もあります。はい。

ついでに私が以前作った「つきときつつき」の改良型もどうぞ。

きつつきつつきつつきつつきつつき
つつきかえせずきつつきつつきた
いとつききつつきつつきたいつき
いつみかづきになる

句点（。）や読点（、）のありがたみが、我ながらしみじみとわかる。しかし、句読点の使い方には定式化しにくいところがある。私はふつう接続詞の直後には読点を打つのだが、世の中では必ずしもそうではない。「しかし」を例に後に点を打つかどうかをみてみると、「毎日新聞社説」の1999年4月～2000年8月までのテクストでは8割程度であった（1108個中891個）。全てではないが、まあ納得できる。

ところが、『吾輩は猫である』『坊っちゃん』『草枕』『野分』『虞美人草』『坑夫』『三四郎』『それから』『門』『彼岸過迄』『行人』『こゝろ』『道草』『明暗』という漱石の小説では、「しかし、」「然し、」と点があるのはわずか14％（「しかし」1427個「然し」437個計1864個の中で各々18個と8個の計26個）。ちなみに現代作家でも、村上春樹『ノルウェイの森』では、「しかし」78例のいずれも読点はないようだ。この「しかし」の例のように、どのような場合に読点を打つかは人による。

句点も同様。「いいえ、～」「いいえ。～」のように、いろいろな場合がある。

そう、句読点、打つべきか打たざるべきか、それが問題だ。

おっと、「それが問題だ」の前は、「打つべきか打たざるべきか――」とでもする方がいい？　いや、その前に「打つべきか」の後に読点を打つべきか？